竹

ますぐなるもの地面に生え、
するどき青きもの地面に生え、
凍(こほ)れる冬をつらぬきて、
そのみどり葉光る朝の空路に、
なみだたれ、
なみだをたれ、
いまはや懺悔(ざんげ)をはれる肩(かた)の上より、
けぶれる竹の根(オワ)はひろごり、
するどき青きもの地面に生え。

〈出典『萩原朔太郎全詩集』（筑摩書房、一九七九年）〉

萩原(はぎわら) 朔太郎(さくたろう)

竹

光る地面に竹が生え、
青竹が生え、
地下には竹の根が生え、
根がしだいにほそらみ、
根の先より繊毛(せんもう)が生え、
かすかにけぶる繊毛(せんもう)が生え、
かすかにふるへ(エ)。

かたき地面に竹が生え、
地上にするどく竹が生え、
まつしぐら(マッシグラ)に竹が生え、

萩原(はぎわら) 朔太郎(さくたろう)

凍(こほ)れる節節(ふしぶし)りんりんと、
青空(コオ)のもとに竹が生え、
竹、竹、竹が生え。

みよすべての罪はしるされたり、
されどすべては我にあらざりき、
まことにわれに現はれしは、
かげなき青き炎(ほのほ)(ホノオ)の幻影(げんえい)のみ、
雪の上に消えさる哀傷(あいしやう)の幽霊(いうれい)のみ、
ああかかる日のせつなる懺悔(ざんげ)(ユウレイ)(アイショウ)をも何かせむ、
すべては青きほのほ(ホノオ)の幻影(げんえい)のみ。

〈出典『萩原朔太郎全詩集』(筑摩書房、一九七九年)〉

【著者】**萩原 朔太郎**(はぎわら さくたろう)
一八八六(明治一九)年―一九四二(昭和一七)年
詩人。群馬県の生まれ。
【著書】『月に吠(ほ)える』『青猫(あおねこ)』『純情小曲集』など